

No. 110
1995.
8. 1

岐阜の博物館

〒501-32 関市小屋名
(百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111(代)
振替 名古屋 6 37909

地域文化向上の場としての博物館

清水 廣美



岐阜県博物館協会は、昭和41年(1966)6月、博物館になみなみならぬ情熱を傾注された方々によって設立された。機関紙「岐阜の博物館」の第1号は、昭和45年(1970)1月8日で、ガリ版刷りである。協会会長岐阜市長松尾吾策氏は、「発刊のあいさつ」のなかで、「博物館運動は、単に古いもののみにとらわれることなく、新しい時代の息吹きに目ざめ、自然科学、人文科学の両面をも取り入れて、人類文化の発展に寄与すべきものである」と説いておられる。この「新しい時代の息吹き」を標榜し、地域文化向上の場として、協会加入登録の館園は、地域に根づいて発展してきた。その当時の会員数は75館園(昭和46年2月)である。その後、協会の「岐阜の博物館ガイドマップ」(平成元年3月発行)では100の館園を紹介するまでになった。現在、加入登録館園は、127で、個人会員23名である。未登録の類似施設館は、かなりあるようだ。岐阜県は全国5位になる。

博物館の役割の一つに、前述した「地域文化の向上」がある。近年、町づくり、村づくりの一環として、博物館、図書館、公民館さらに学習館等が競って建設されて大変よろこばしいことに思う。しかし建物だけ、外観だけにならないように、内容の充実を図らなければならないと思っている。地域の博物館として、その町の博物館に行けば、特色が一目でわかることが大切である。例えば、美濃市なら和紙になろう。一枚の和紙に、美濃市の歴史、文化、産業、生活さらに自然を語らせること、それも過去だけではなく、未来をも語らせることが博物館の役

割である。

もの言わぬ「もの」に語らせるのは、「人」の力である。いかにポイントをしぼって巧みに語らせるかが、館長はじめ館員の見識である。「博物館に専門的職員として学芸員を置く」(博物館法第4条)になっているが、公立を含め学芸員のいない博物館が多い。この点については、協会としても、「置く」方向で努力をしていきたいと思っている。しかし、職員各自が研修に励み、補完しなければならない。協会では、会員研修会を年3回開催し、資料整理、展示テーマの設定、展示方法、マルチメディアソフトの制作等の内容で指導者を招き研修している。参加者の少ないことが残念である。県博物館としても協力できる点は労を惜しまない。

一方、地域の博物館は、地域により開かれた博物館として、地域の人々の支援を仰ぐとよいのではないかと思う。特に博物館で体験的な催し物、例えば紙細工、陶芸教室などでは、地域の高齢者、若手活動家を指導者・サポーターとして力を借りると、博物館自体も活性化し、参加者、サポーターも地域に生きるという満足感が生まれてくるのではないかと思う。博物館は、こうして地域文化向上の場となり、文化を共に創造する場となろう。また、この場を通して館員自身がいろいろ勉強をするものである。先人の知恵と技術に学び、若い人、高校生のエネルギー、小中学生の素朴な好奇心に揺り動かされて、館員自身が成長し、「もの」をもう一度見直し、再発見することになる。

生涯学習の時代、博物館の地域文化向上の役割は、ますます期待される。

(岐阜県博物館長)

第64回公開講座報告

「長良川に生息する魚」

と き 平成7年5月21日
ところ 岐阜県博物館
講 師 駒田格知氏

第64回公開講座（今年度第1回）は岐阜県博物館の特別展「岐阜の淡水魚」に係る講演会と共催で行われました。

講師の駒田格知先生は現在は名古屋女子大学の教授でいらしゃいますが、かつては朝日大学の教授であられ、長良川水系を中心とした淡水魚の分布調査・研究、魚の骨格の研究を進めていらしゃいます。今回の講演会では長良川及びその支流に生息する魚の種類や生態を、スライド・生態写真・X線写真を交えて分かりやすく説明されました。

参加者は100名を数え、最後まで熱心に聴講されました。

講演要旨

長良川の淡水魚の種類

1. 大陸性由来の魚種

中国大陸から長い歴史を経て日本列島に移動してきた魚種。純淡水域に生活し、比較的活動範囲が狭い。

（例）コイ、アブラハヤ、カワムツ、オイカワ等のコイ科魚類、ドジョウ科、ナマズ科、ギギ科の魚類の大半

2. 海洋性由来の魚種

海洋生活をしていた魚類が産卵・餌等の生活的要求を満たすために河川に溯上してきた魚種。現在でも海洋とのつながりが強い。長良川で採捕確認されたもののうち、伊勢湾との関係が深く、往来しているものは、15種である。

（例）アマゴ、アユ、カジカ、シマハゼ



スズキ、ボラ、ウナギ等

3. 外来魚種

ごく最近になって、人の手によって外部から長良川に持ち込まれた魚種。流れがある河川での繁殖が困難なことや、低い水温に弱いことなどから、長良川における自然繁殖は可能性が薄いとされていた。しかし、最近岐阜市の南部より下流域でブルーギルの稚魚がよく採捕され、自然繁殖が活発に行われていると思われる。これと同様のことがカダヤシやオオクチバスでも知られている。これは、外来魚種に適応能力があるためか、長良川の変化かは、今後の課題である。

（例）ブルーギル、オオクチバス、カダヤシ

まとめ

長良川に生息している魚種は他の河川よりも豊富で生息量も多い。これは長良川という生息環境が多様性に富んでいるからである。つまり、岸辺にヨシや柳が茂り、仔・稚魚の育成に必要な昆虫などの生物が多く生息し、水深は50～60センチメートルで、流れの早さがほとんではない環境が存在しているからである。しかし、長年そこで観察していると、時代と共に生息魚種の組成に変化が生じており、今後の研究課題である。

（公開講座委員 富田幸八）

東海地区博物館連絡協議会 総会報告

提出議題「博物館の地震対策について」

平成7年度東海地区博物館連絡協議会・日本博物館協会東海支部の理事会及び総会が、6月20日・21日の2日間、神奈川県横浜市において開催されました。

総会出席者は110名を越え、岐阜県からは、当連絡協議会理事の青木允夫様、今年度より新しく監事になられた松本五三様をはじめ11名が出席しました。



平成8年度は岐阜県で開催…総会報告

1. 会長挨拶 小野仁一郎氏
2. 来賓祝辞
神奈川県教育庁生涯学習部長 山崎征男氏
3. 表彰者 元山梨県立美術館 早川二三郎氏
4. 新役員紹介
5. 議題
 - ①平成6年度事業報告及び決算報告について
 - ②平成7年度事業計画及び予算案について
 - ③提出議題について
 - ④平成8年度開催県について
6. 阪神大震災文化財救援ボランティア報告
神奈川県立金沢文庫学芸員 福島金治氏

博物館の地震対策について

阪神大震災の折、博物館における展示物の被害や一般文化財への被害が問題になりました。

東海地震が予想される当地区博物館にとって、入館者に対する避難誘導方法等は無論のこと、文化財の保護、展示ケース等のガラス対策などの問題があります。

このことをふまえ、提出議題として「博物館における地震対策について」が出されました。

- ①静岡県立美術館の地震に対する取組み
- ②徳川美術館館長の徳川義宣氏の発表
- ③信玄公宝物館の取組み

の実践報告等があり、意見交換、質疑応答が活発に行われました。当連絡協議会としては今後、各館の取組みについて取りまとめをし、報告をすることになりました。

施設見学

〈神奈川県立歴史博物館〉

今年の3月にそれまでの総合博物館を自然系と人文系に分離・分館し、リニューアルオープンをした。建物は明治時代の銀行を用いているが、展示室、情報システム、ライブラリー、映像コーナー等、最新の設備が整っている。

〈横浜美術館〉

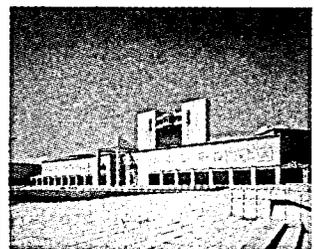
横浜市の「みなとみらい21」地区に平成元年に開館した。市民の多様な美術に対するニーズにこたえる場として、近代現代美術の鑑賞を目的としている。

〈三菱みなとみらい技術館〉

私たちの生活と、深い関係にある科学技術の現在・未来の姿を「環境」「宇宙」「海洋」「エネルギー」「コミュニケーション」の5つのゾーンに分け紹介している。



神奈川県立
歴史博物館



横浜美術館

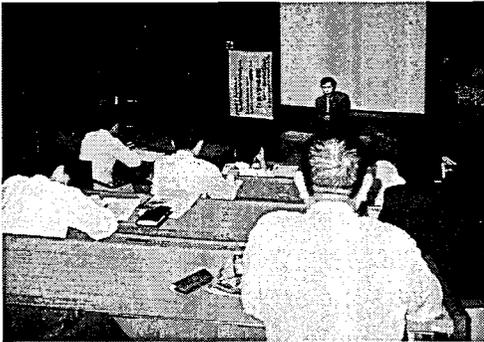
(協会事務局 富田幸八)

第31回 会員研修会報告

生涯学習の場としての博物館の取り組みについて

〈場所〉内藤記念くすり博物館
〈日時〉平成7年6月15日 13時～16時
〈研修1〉「美術館としてのコレクションと展示について」

岐阜県美術館 学芸部長 平光明彦氏



美術館は、作品があって初めて施設として成り立つものであるから、収集は最も大切な部分である。さらに、収集した作品を多くの人々に鑑賞してもらうことが美術館の使命であり、同時にその作品は、その時代の人々のためにだけあるのではなく、次世代へと伝えていかなければならない人類の宝でもある。従ってコレクションをするということは、いい状態で作品を保管する責任も出てくるのである。

この考えを前提として岐阜県美術館では、どのようにコレクションづくりをし、展示を考えているかについて報告する。

県美術館の収集方針は、地方美術館としての立場から、県ゆかりの作家を対象とすることは当然の使命であり、責任と考えている。しかしそれだけで県民にとって満足できる美術館といえるかという点決してそうではない。世界的な名品を身近に常に鑑賞できることはより望ましいことである。そこで西洋の美術も対象となる。

県美術館においては、今世紀の美術に大きな影響を与えた象徴主義に着目し、ルドンをその中核に据えた。焦点を絞ることによって、数ある国内の美術館の中でも特色ある美術館となり、世界的にも注目されるようになった。

展示と保存は、常に同時に平行して考えなければならないことで、温・湿度、光、害虫、取扱い方等、作品の特性を熟知することが重要である。

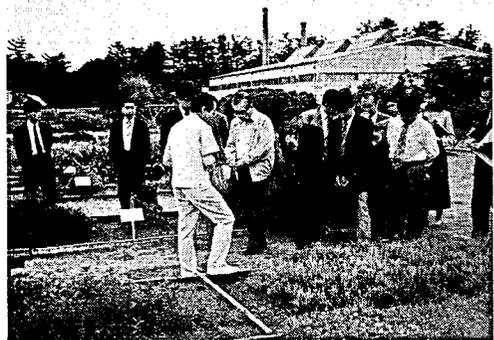
これら本日の主題である「収集と展示」の全てにかかわるのが学芸員であり、その責任も大である。

〈研修2〉「“薬草説明会”と“薬用植物友の会”の取り組み」

内藤記念くすり博物館

付属薬用植物園主任 白井英夫氏

4月から11月まで、その月に当植物園で花を咲かせる薬草を中心に、その栽培法と利用法等を解説する“薬草説明会”を、一昨年より実施してきた。そのとき「薬草についてもっと知りたい」「栽培法を教えてほしい」「利用方法を含めハーブの勉強をしたい」等の声があり、昨年度からは薬草の植え付けから栽培・収穫・調整・利用までを、実地作業を通して習得できる“薬用植物友の会”も行なってきた。今年も、カミツレ、エビスグサ(ハブ茶)、トウキ(当帰)を栽培中である。



活動状況の概要説明の後、研修会場を植物園に移し研修を深めた。

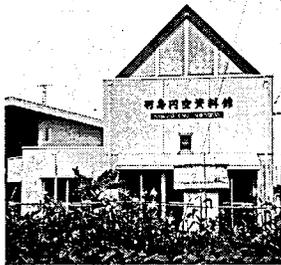
休憩時にはメグスリノキとエビスグサの薬草茶を飲ませて頂くなど、内藤記念くすり博物館の方々にはたいへんお世話になりました。

(研修委員 高橋 涼)

羽島円空資料館

〒501-62 Ⅷ (0583)98-6264

羽島円空資料館がオープンしたのは昭和63年1月。俳優の丹波哲郎氏が名誉館長である。切り妻風の鉄筋コンクリート2階建ての近代的建物です。地元の方々の交流の場として、そして円空の普及、宣伝を兼ねて設立されました。1階が集会場、2階が展示室として利用されています。館の運営については1名が当館に常駐され、資料館事業の紹介や来館者へのサービスに従事してみえます。



資料館内には稲荷大明神、五輪塔、童子像の3体の円空仏が展示され、また全国各地の円空仏のレプリカが約50体、円空に関する写真や絵画、多数の書籍なども展示されています。

入館者は全国各地に及び、観光バスで訪れる団体客も多く、最近では、美術関係、彫刻関係を専門的に研究されている方の来館も目立つようになってきています。しかし、県内の来館者が少ないのが惜しまれます。



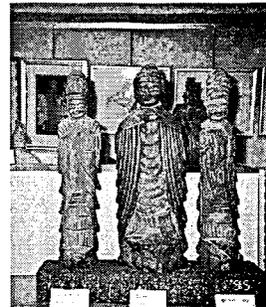
円空資料館を利用した地元の学習活動も盛んに行われており、太鼓の練習会、子供会の研修会、地元の各種団体や地区の研修会等が随時実施されています。また、地元の方々により深く円空について興味・関心を抱いてもらえるよう、要望に応じて講義や解説も実施されています。

円空仏は昭和30年頃より社会的にその芸術的、

価値が注目されるようになりました。40年の歳月が流れた現在でも、静かなブームが続いています。円空仏を鑑賞する人であれば誰れしも、荒削りで、エネルギッシュな彫刻法や表現法の的確さに驚くのであります。それと同時に円空仏が醸し出す美しさと神秘さにも驚嘆の念をもつことと思います。

博物館協会の機関紙の取材をお願いし、羽島円空資料館を訪れると、前館長の加藤千秋氏、現館長の加藤義治氏の両名がお待ちになってみえた。お二人の方から円空資料館の運営や維持について、また、円空の生い立ち等について懇切丁寧な説明をしていただきました。

館長さんの話では、来館者の対応とサービスの充実が当面の課題であること、また、最近では来館者の要求が多様になり、その要求に応じていくことが非常にむづかしくなっており、ボランティアがお願いできれば、助かる等の率直な気持も吐露されました。



会話が夢中となり、ふと気がつくと取材の予定時間をはるかに超えていました。

私達がなにげなく入館している博物館、その維持と運営に当たっている方々の苦

労と努力にあらためて気がつくと同時に羽島円空資料館の円空に対する思い入れ、円空を後世に伝えていこうとする意気込みを感じながら、資料館をあとにしました。

- 交通機関 名鉄電車・竹鼻線中区駅下車。
- 開館時間 午前9時より午後5時まで
- 入館料 300円(団体割引有り)
- 休館日 毎週月曜日
- 館長名 加藤義治

(岐阜県博物館 首我孝司)

養老町郷土資料館

〒501-13 岐阜県養老郡養老町石畑 483-2
TEL (0584) 32-1281

養老町郷土資料館は、平成8年6月15日にオープンした新しい博物館である。

この資料館の取材に訪問した時、ちょうど戦後50年企画展「終戦50年をしのんで」の打ち合わせ会の最中であった。

館長の中野旭さんと、町文化財保護審議委員であり運営委員会会長でもある藤田信誠さんが丁寧に対応してくださり、いろいろお話を伺いすることができた。



その中で、中野館長さんや藤田会長さんが強調されたことは、失われていく農具、家庭用品を、公民館ができたのを機会に収集、展示していくことを基本とするということである。

大規模建築と豊富な収集資料に囲まれた中で、高度技術を駆使した博物館を目指すのではなく、小規模でも地域に根差したユニークなテーマ



性を持つ博物館を目指しておられるようである。

そんな話を聞きながら、資料館を見学させていただいた。中に入るとまず目に付くのは、大型の地形模型と養老町の自然、文化を紹介するビデオテレビである。10分ほどビデオを觀賞してから右手コーナーの写真パネル「養老町の四季」「養老の自然」へと移っていく。

特に、この資料館が力を入れておられる「くらしと文化」のコーナーには、歴史のある農具家具を中心としたさまざまな民具が展示されている。

また、この資料館の特徴としてあげられるのは、常設展示室の隣に特別展示室が設置されていることである。

この特別展示室で様々な企画展が開催されるということである。

前述したように、7月15日(土)から8月31日(木)まで、戦後50年企画展「終戦50年をしのんで」と題し、戦争中暮らしの中で使われたものや戦地に持っていったものを展示されるそうである。ぜひ御覧ください。

養老町郷土資料館の案内は次のとおりです。

○開館時間/午前9時30分～午後5時

○休館日/毎月第3日曜日
12月29日～翌年1月3日まで

○入館料/無料

